

清末西安の教育と日本人教習

—足立喜六を中心に—

村松 弘一

はじめに—清末西安と足立喜六

足立喜六は『長安史蹟の研究』（東洋文庫，1933年）の著者として知られている。本書は足立が滞在した20世紀初頭の西安周辺の漢唐の陵墓・長安城遺跡や寺観，碑林等についての詳細な記載があり，近代西安史の重要な資料のひとつと言える。本書は，1933年に東洋文庫から刊行され，その後，1983年には原書房，2006年には鳥影社によって復刊された。中国語訳は1935年に『長安史迹考』（楊鍊将訳，上海商務印書館），2003年に『長安史迹研究』（王双懷・淡懿・賈雲訳，三秦出版社）が刊行されている。足立は『長安史蹟の研究』以外にも、『考証 法顕伝』（三省堂，1936年），『法顕伝』（法蔵館，1940年），『大唐西域記の研究』（法蔵館，1942・43年），『大唐西域求法高僧伝』（岩波書店，1942年），『入唐求法巡礼行記』（平凡社，1970・1985年）など多くの東洋学にかかわる書を刊行している。



足立喜六氏（鶴田温子氏所蔵）

明治4年（1871）愛知県名古屋千種区に生まれた足立の経歴は，①西安以前②西安教習時代③西安帰国後④退職後に区分できる（資料1「足立喜六年譜」参照^[1]）。①西安以前では，明治31年（1898）に東京高等師範学校を卒業したのち，熊本県・茨城県・愛媛県・山梨県の高等小学校・中学校・師範学校などで教鞭をとった。熊本2年，茨城1年，愛媛3年4ヶ月，山梨4ヶ月の在任で転じている。また，愛媛から山梨へ転任する過程で，1905年8月5日から9月16日まで1ヶ月あまり休職している^[2]。この時期は平教員の時代である。②西安教習時代は，1906年3月から1910年2月まで陝西高等学堂に数学・物理の教習として赴任した時期である^[3]。後述するようにこの間の1907年に西安を訪問した桑原隲蔵と宇野哲人との出会いが『長安史蹟の研究』執筆の契機となった。③西安帰国後は，1910年8月に愛知県立高等女学校に着任し，大正9年（1920）から昭和5年（1930）まで愛知県一宮町立高等女学校校長となった。この約20年は愛知での女学校教諭・校長時代である。ここ

資料1 足立喜六年譜

| | | | |
|-------|-------|--------|--------------------------------------|
| 1871年 | 明治4年 | 8月27日 | 名古屋市千種区御柳町三丁目七十六番地に生まれる |
| 1888年 | 明治21年 | 7月20日 | 尋常小学校受業生免許 |
| 1888年 | 明治21年 | 11月30日 | 高等小学校受業生免許 |
| 1889年 | 明治22年 | 7月28日 | 静岡県尋常師範学校入学 |
| 1893年 | 明治26年 | 3月31日 | 静岡県尋常師範学校卒業 |
| 1893年 | 明治26年 | 4月1日 | 山名高等小学校訓導 |
| 1893年 | 明治26年 | 6月1日 | 歩兵十八連隊入営(6週間) |
| 1894年 | 明治27年 | 5月12日 | 東京高等師範学校入学 |
| 1898年 | 明治31年 | 3月31日 | 東京高等師範学校理科卒業 |
| 1898年 | 明治31年 | 3月31日 | 熊本県尋常中学済々黌教諭兼熊本県八代郡南部高等小学校訓導 |
| 1900年 | 明治33年 | 3月31日 | 熊本県第一中学校教諭(校名改称) |
| 1900年 | 明治33年 | 4月4日 | 茨城県土浦中学校教諭 |
| 1901年 | 明治34年 | 4月15日 | 愛媛県師範学校教諭兼付属小学校主事 |
| 1905年 | 明治38年 | 8月5日 | 休職 |
| 1905年 | 明治38年 | 9月16日 | 山梨県師範学校物理教授嘱託 |
| 1906年 | 明治39年 | 1月 | 陕西省陝西高等学堂教習に招聘されることが確定 [長安史蹟の研究] |
| 1906年 | 明治39年 | 2月16日 | 神戸港出発 [長安史蹟の研究] |
| 1906年 | 明治39年 | 2月20日 | 清国陕西省西安府陝西高等学堂教習に招聘せらる |
| 1906年 | 明治39年 | 3月11日 | 鄭州発 [長安史蹟の研究] |
| 1906年 | 明治39年 | 3月22日 | 陕西省西安府到着 [長安史蹟の研究] |
| 1906年 | 明治39年 | 9月27日 | 公立学校職員退隠料及遺族扶助料法に依り一時金四百二十円を給す |
| 1907年 | 明治40年 | 9月20日 | 桑原隲蔵・宇野哲人西安訪問(～10月9日) [考史遊記・清国文明記] |
| 1907年 | 明治40年 | 10月4日 | 大秦景教流行中国碑盗難未遂事件 [清国文明記] |
| 1908年 | 明治41年 | 8月19日 | 東亜同文会調査班訪問(～9月7日) [東亜同文会清国内地調査] |
| 1910年 | 明治43年 | 2月 | 西安から帰国 [長安史蹟の研究・小引] |
| 1910年 | 明治43年 | 8月20日 | 愛知県高等女学校教諭 |
| 1920年 | 大正9年 | 7月20日 | 愛知県一宮町立高等女学校校長兼教諭 |
| 1930年 | 昭和5年 | 4月18日 | 退職 |
| 1933年 | 昭和8年 | 12月25日 | 『長安史蹟の研究』(東洋文庫)刊行 |
| 1935年 | 昭和10年 | | 『長安史迹考』(楊鍊将訳, 上海商務印書館) |
| 1936年 | 昭和11年 | | 『考証法顯伝』(三省堂) |
| 1937年 | 昭和12年 | | 『法顯伝考証』(何健民, 張小柳合譯, 国立編訳館) |
| 1940年 | 昭和15年 | | 『法顯傳 中亞・印度・南海紀行の研究』(法蔵館) |
| 1942年 | 昭和17年 | | 『大唐西域記の研究』(法蔵館) |
| 1942年 | 昭和17年 | | 『大唐西域求法高僧伝』(義浄著, 足立喜六訳注, 岩波書店) |
| 1949年 | 昭和24年 | | 死去 |
| 1970年 | 昭和45年 | | 『入唐求法巡礼行記』(円仁著, 足立喜六訳注, 塩入良道補注, 平凡社) |
| 1983年 | 昭和58年 | | 『長安史蹟の研究』(復刊, 原書房・東洋書林) |
| 1990年 | 平成2年 | | 『長安史迹考』(復刊, 「中国西北文献叢書」第113冊) |
| 2003年 | 平成15年 | | 『長安史迹研究』(新訳書, 王双懷・淡懿・賈雲訳, 三秦出版社) |
| 2006年 | 平成18年 | | 『長安史迹考』(復刊, 中国早期考古調査報告) |
| 2006年 | 平成18年 | | 『長安史蹟の研究』(復刊, 鳥影社) |
| 2006年 | 平成18年 | | 『法顯傳 中亞・印度・南海紀行の研究』(復刊, 鳥影社) |

※資料来源:

足立喜六履歴書(昭和21年6月20日付, 鶴田温子氏所蔵, 1933年までの記載あり)及び1933年以降については刊行物の書誌データによった。

までが教師としての足立喜六の足跡である。④退職後は東洋史研究者の時期である。1933年刊行の『長安史蹟の研究』を皮切りに、西安時代の成果をもとに研究書を出版した^[4]。このように30代後半の西安教習時代の体験こそが足立のその後の人生に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。

さて、本稿では、足立を東洋史研究へと誘った西安教習時代に着目したい。足立が西安に赴いた1906年は日露戦争後、清国が最も多くの日本人教習を受け入れた時期であった。西安の日本人教習としての足立喜六に焦点をあて、そこから、清末の陝西省・西安の教育や日本人教習の動向、さらには足立に影響を与えた東洋史学者との出会いについて論ずることとしたい。まず、(1) 足立の西安在留時前後の陝西省の日本人教習の動向について整理する。(2) 足立が所属した陝西高等学堂の成立過程と授業課程について述べ、(3) 西安を訪れた日本人の東洋史学者と足立との交流から西安での生活をみることにしたい。

1. 陝西省における日本人教習の動向

明治期日本の教育制度や学校・教員は清末の教育改革に大きな影響を与えた。日清戦争後、1896年から1906年にかけて日本留学は第一次のピークを迎える。1896年に13人からはじまった日本への留学生、1906年には7285人にまでのぼった^[5]。それと同時に日本の教育の現状に関する現地調査もおこなわれた。さらに、日露戦争後には、清朝が日本人教習を積極的に受け入れた。1905・1906年に中国各地に招聘された日本人教習は600人を超え、派遣先は沿海部のほか、四川・雲南・貴州など内陸部に及んだ。しかし、1906年～07年をピークとして漸次その数は減り、1911年の辛亥革命の混乱のなかでほとんどの教習は帰国し、中国近代教育史における「日本人教習の時代」は幕を閉じたと言われている^[6]。

足立が滞在していた1906年から1910年は、まさに、中国全土における日本人教習の数が最も多い時期であった。ここでは、足立とともに西安に滞在した日本人教習に関する情報およびその前後の清末民国初の陝西省における日本人教習の動向を見たい。具体的な人名や所属・期間などについては、日本側の外務省記録（外務省外交史料館所蔵）^[7]やその他の関連文献から復元が可能である。それらの資料を整理したものが資料2である。以下、年をおって説明したい。

- ① 1906年 足立を含め5名の日本人教習が滞在した（『西北大学史稿』、一部は姓のみ判明）。後述のようにのちに監督となる周鏞自らが1905年に日本に赴き、日本人教習を招聘したと考えられる。足立と鈴木の名が翌年も陝西高等学堂に残る。
- ② 1907年 桑原隲蔵『考史遊記』（弘文堂書房、1942年）のなかに、8名の日本人教習の名が記されている。そのうち、足立と鈴木の名は高等学堂、その他は師範学堂・西安府中

清末西安の教育と日本人教習—足立喜六を中心に— (村松)

資料2 清末民国初期在西安日本人教習一覧表

① 1906年 『西北大学史稿』

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 |
|-----|-------|----|--------|------|---------------|------|----|
| 西安 | 足立喜六 | | 高等学堂教習 | | | | |
| | 田中 | | 高等学堂教習 | | | | |
| | 菅野 | | 高等学堂教習 | | | | |
| | 葉薫 | | 高等学堂教習 | | | | |
| | 鈴木直三郎 | | 高等学堂教習 | | | | |

② 1907年 桑原隲蔵『考史遊記』長安の旅 明治40年9月

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 | (出身校) |
|-----|-------|----|--------------------|------|---------------|------|----|---------|
| 西安 | 足立喜六 | | 高等学堂教習 | | | | | 東京高等師範 |
| | 鈴木直三郎 | | 高等学堂教習 | | | | | 東京高等師範 |
| | 森孫一郎 | | 師範学堂教習 | | | | | 東京高等師範 |
| | 中澤澄 | | 師範学堂教習 | | | | | 東京高等師範 |
| | 田中久蔵 | | 師範学堂教習 | | | | | 東京高等師範 |
| | 吉川金藏 | | 高等師範学堂兼法 政学堂教習? | | | | | 日本大学 |
| | 松里政登 | | 高等師範学堂教習 ? | | | | | 美術学校 |
| | 阿部正治郎 | | 西安中学堂教習 | | | | | 臨時教員養成所 |

③ 1908年 清国備聘本邦人名表 明治41年1~4月調査 (外務省外交史料館所蔵)

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 |
|-----|-------|------------|-------------------|------|---------------|----------|-----|
| 西安 | 足立喜六 | 銀二百元 | 高等学堂教習 | 理科教授 | 山梨県師範 学校教諭 | ~明治42年3月 | 静岡県 |
| | 鈴木直三郎 | 銀二百元 | 高等学堂教習 | 博物教授 | | ~明治42年3月 | 三重県 |
| | 吉川金藏 | 銀百八十元 | 高等師範学堂兼法 政学堂教習 | | | ~明治42年3月 | 東京府 |
| | 松里政登 | 銀百四十元 | 高等師範学堂教習 | 図書教授 | 岡山県師範 学校教諭 | ~明治42年3月 | 福岡県 |
| | 阿部正治郎 | 銀百六十元 | 西安中学堂教習 | 理科教授 | | ~明治41年3月 | 新潟県 |
| 三原 | 謝花寛功 | 銀二百元 | 弘道高等学堂教習 | 理科教授 | 御影師範学 校教諭 | ~明治42年3月 | 沖縄県 |
| | 佐藤進三 | 銀二百元 | 弘道高等学堂教習 | 博物教授 | | ~明治42年4月 | 東京府 |
| 西安 | 森孫一郎 | 銀二百五十 元 | 師範学堂教習 | 教育 | | ~明治41年3月 | 岐阜県 |
| | 中澤澄 | 銀二百元 | 師範学堂教習 | 教育 | | ~明治41年3月 | 山梨県 |
| | 田中久蔵 | 銀二百元 | 師範学堂教習 | 教育 | | ~明治41年3月 | 東京府 |

④ 1909年~1910年 清国備聘本邦人名表 明治42年12~43年5月調査 (外務省外交史料館所蔵)

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 |
|-----|-------|------|----------------|------|---------------|---------------------|-----|
| 三原 | 井上英治 | 銀二百元 | 高等工業学堂染織 技師 | | | 明治42年11月~ 43年11月 | 山形県 |
| | 守住直幹 | 銀百元 | 高等工業学堂機械 技師 | | | 明治42年11月~ 43年11月 | 京都府 |
| | 岡田喜太郎 | 銀七十元 | 高等工業学堂織物 工師 | | | 明治42年11月~ 43年11月 | 京都府 |
| | 藤原潤平 | 銀六十元 | 高等工業学堂色染 工師 | | | 明治42年11月~ 43年11月 | 京都府 |

⑤ 1911年～1912年 清国革命動乱ニ関スル情報（陝西）明治44年11月5日～明治45年1月10日（外務省外交史料館所蔵）

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 | 備考 |
|-----|-------|----|---------|------|---------------|------|-----|---------|
| 西安 | 鈴木直三郎 | | 陝西高等学堂 | | | | 三重県 | |
| 三原 | 佐藤進三 | | ？ | | | | 東京市 | 妻・長女 |
| | 井上英治 | | 高等工業学堂？ | | | | 山形県 | 妻・長女・長男 |
| | 守住直幹 | | 高等工業学堂？ | | | | 京都市 | |
| | 岡田喜太郎 | | 高等工業学堂？ | | | | 京都市 | |

⑥ 1912年 支那備聘本邦人名表 大正元年12月現在（外務省外交史料館所蔵）

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 |
|-----|------|-------|--------|---------------|---------------|------|-----|
| 西安 | 福地秀夫 | 銀百三十兩 | 西北大学教習 | 日本語及理 化学教授 | 無し | 満一年 | 長崎県 |
| | 太田資事 | 銀百三十兩 | 西北大学教習 | 日本文教授 | 無し | 未定 | 茨城県 |

⑦ 1913年 支那備聘本邦人名表 大正2年12月現在

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 |
|-----|------|-------|--------|---------------|---------------|-----------------|-----|
| 西安 | 福地秀夫 | 銀百三十兩 | 西北大学教習 | 日本語及理 化学教授 | | 大正2年6月～ 3年5月 | 長崎県 |
| | 太田資事 | 銀百三十兩 | 西北大学教習 | 日本文教授 | 予備陸軍准 士官 | 未定 | 茨城県 |

⑧ 1914年 支那備聘本邦人名表 大正3年12月現在

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 |
|-----|------|-------|----------------|-------|---------------|-------------------|-----|
| 長安 | 福地秀夫 | 銀百八十兩 | 西北法政専門学 校教習 | 日本語 | | 大正4年1月～ 4年6月 | 長崎県 |
| 三原 | 有馬龍彦 | 銀二百元 | 工業学校教師 | 図書教授 | | 大正3年2月～ 4年2月 | 東京府 |
| | 塚田良介 | 銀百二十元 | 工業学校教師 | 染色科教授 | | 大正3年12月～ 4年12月 | 石川県 |
| | 種村吉雄 | 銀百十元 | 工業学校教師 | 紡績科教授 | | 大正3年10月～ 4年10月 | 山形県 |

⑨ 1915年 支那備聘本邦人名表 大正4年12月現在

| 所在地 | 姓名 | 月俸 | 職名 | 司掌事項 | 本邦官職 または学位 | 契約期限 | 貫籍 | 備考 |
|-----|------|-------|--------------|-------|---------------|-------------------|-----|------------------|
| 三原 | 有馬龍彦 | 銀二百元 | 省立工業学校教 師 | 図書教授 | | 大正3年2月～ 5年3月 | 東京府 | 大正5年3月15 日限辞職 |
| | 塚田良介 | 銀百二十元 | 省立工業学校教 師 | 染色科教授 | | 大正3年12月～ 5年3月 | 石川県 | |
| | 種村吉雄 | 銀百十元 | 省立工業学校教 師 | 紡績科教授 | | 大正3年10月～ 5年10月 | 山形県 | |

1916年～1918年 日本人教習なし

「支那備聘本邦人名表 大正5年12月現在」

「支那備聘本邦人名表 大正6年12月現在」

「支那備聘本邦人名表 大正7年12月現在」

学堂の教習。このうち、5名が足立と同じ東京高等師範学校の卒業生であった。桑原は1899年より当時まで、東京高等師範学校教授であり、教員が卒業生の赴任先に訪れたことになろう。ほかの3名は日本大学・美術学校・臨時教員養成所の卒業生であった。彼ら

はみな、1908年まで滞在している。

- ③ 1908年 日本外務省記録「清国傭聘本邦人名表明治41年1~4月調査」(JACAR : B02130225400)によれば1908年には10名の日本人教習が陝西省で教育に従事していたことがわかる。そのうち、西安在住の8名は1907年から継続して滞在している。1908年に西安を訪問した東亜同文会の調査報告には、高等学堂に2名、師範学堂に5名の教習がいたとある。高等学堂の2名は前年同様足立と鈴木の2名。師範学堂については、「清国傭聘本邦人名表」では師範学堂(3名)と高等師範学堂(2名)を区別しているが、同文会報告はこれらを合算したものであろう。三原県は渭北の流通の拠点であり、弘道(宏道)高等学堂には2名の教習が在籍していた。
- ④ 1909年~1910年 日本外務省記録「清国傭聘本邦人名表明治42年12~43年5月調査」(JACAR : B02130226900)によれば、1909~1910年における陝西省の日本人教習は4名とある。いずれも、三原県の高工工業学堂に所属する。この人名表の目次にも陝西省の教習数は4名とあり、三原県の4名以外に日本人教習はいないように思える。しかし、⑤の資料には1908年の③にみえる陝西高等学堂の鈴木直三郎および弘道高等学堂の佐藤進三の名があり、1909年から10年までには記載はない。詳細は不明であるが、おそらくは1909年から1910年にもこの2名は継続して陝西省に滞在していたのではなかろうか。また、足立も1910年2月まで西安に滞在したはずであるが、④の外務省記録の人名表には記されていない。
- ⑤ 1911年~1912年 辛亥革命後の1911年~1912年については、「清国傭聘本邦人名表」のような全体調査の記録は無いが、革命の混乱期における日本人の動向をまとめた外務省記録「清国革命動乱ニ関スル情報」(1911~1912年 JACAR : B03050620700)に陝西省の状況および帰国者リストが付されている。これによれば、西安の陝西高等学堂には足立の同僚であった鈴木直三郎がいた。また、陝西省内には、日本人教習と考えられる三原県にいた4名の日本人教習のほか、西安に売薬商がいた。彼らは辛亥革命後の混乱のため、この後日本へと帰国することとなる。
- ⑥~⑨ 1912年~1915年 「清国傭聘本邦人名表」と同様の全国規模の調査表である外務省記録「支那傭聘本邦人名表」が1912年から18年にかけて残されている。辛亥革命を契機にそれまでいた日本人教習は帰国し、人名表には新たな教習の名が記されている。1912年に陝西高等学堂は西北大学となり、日本人教習として福地秀夫・太田資事の2名が赴任した(JACAR : B02130228200)^[8]。1914年には三原県の工業学校に3名の日本人教習が着任し、図書教員のほか、2名は染色・紡績などの教育にあたった。また、福地秀夫は西北大学の廃止をうけて新たに設置された西北法政専門学校の教習となっている(JACAR :

B02130228400)。15年には三原工業学校にのみ日本人教習がおり（JACAR：B02130229600）、1916年から1918年の記録では陝西省に滞在する日本人教師はゼロとなる。

このようにみても、陝西省の日本人教習の数は1908年の10名をピークに、辛亥革命の混乱で一旦なくなったが、革命後再び新たな教習が招聘されたが、1915年をもってなくなり、陝西省における日本人教習の時代は終わりを告げることとなった。

2. 陝西高等学堂の成立過程と教育課程

つぎに、足立が教壇に立った陝西高等学堂の1910年に至るまでの過程と資料からわかる教育課程の状況について述べたい。

2.1 陝西高等学堂の成立過程

陝西高等学堂は現在の西北大学の前身にあたる。その起源は1773年（乾隆38）の青門学舎・春明学舎の設立に遡ることができる。1802年（嘉慶7）には両学舎を合わせ養正書院となり、道光年間（19世紀前半）には崇化書院と改名し、1890年（光緒16）には咸長考院となった。これとは別に、日清戦争後の1898年（光緒24）に游芸学塾（格致学堂）が開設された。これら咸長考院と游芸学塾をあわせて、1902年（光緒28）に陝西大学堂が設置された。1904年に公布された「奏定学堂章程」に基づき、1905年（光緒31）には陝西高等学堂となった。この陝西高等学堂は1912年3月まで続き、その後、陝西法政学堂・陝西実業学堂・陝西農業学堂・陝西客籍学堂とともに、1912年3月に最初の西北大学が設置されることとなる^[9]。

さて、足立が西安に来たのは1906年3月。その当時の陝西高等学堂監督（校長）は樊増祥であった。そのため、後述するように、東柳巷の樊増祥邸の前の邸宅に足立の公館が用意されたのであろう。その後の監督は楊宜瀚（1906年5月～9月）、周鏞（1906年～1911年）と続く。周鏞は監督となる直前の1905年に日本へと派遣され、日本の学務を調査し、教師の招聘や図書・儀器を購入する任務をおこなった^[10]。また、算術教習の狄楼海も日本人教習の招聘のため、このとき周に同行して訪日している。足立の派遣はこの周鏞や狄楼海の日本文訪問と関係する可能性がある。足立の滞在期間中には、『開方数理図説』や『級数比類』などの著作をもつ陝西省で著名な数学者であった李異材が算学教習として在籍していた。このころ、清国学生の日本留学も盛んにおこなわれ、1905年には、陝西省の陝西高等学堂・三原宏道学堂・陝西師範学堂から合計48名（官費生31名、宦籍自費生17名）が派遣された。派遣先は、早稲田大学・振武学校・経緯学堂・済美学堂であった^[11]。

2.2 陝西高等学堂の授業科目・時間

足立の滞在中の高等学堂の授業科目・時間はどのようなものであっただろうか。「光緒三十二年八月初一日浙江道監察御使王步瀛奏」に、1906年の「陝西高等学堂功課表」(時間割表)が示されている(資料3①)。この課程表では倫理1, 講経2, 国文1, 日文8, 英文12, 歴史2, 地理2, 算学3, 理化1, 体操4の合計36時間である。王步瀛はこの上奏文で、英文・日文の時間の合計が週20時間で、一日4時間に達することもあり、中国の根本的な学問を凋落させてしまうとした。そのため、奏定学堂章程に照らして、改良すべきとした^[12]。「奏定高等学堂章程」(光緒29年, 1904年1月13日)には、例えば第二類(格致科・工科・農科)の2年であれば、人倫道德1, 經学大義2, 中国文学2, 兵学1, 体操3, 英語7, 徳語或いは法語7, 算学4, 物理3, 化学3, 図画3と示されている^[13]。ここでは、英語とドイツ語もしくはフランス語の合計が14時間となり、人文系の第一類の1年および2年次には合計18時間とされ、陝西高等学堂の外国語教育の時間数は章程よりも多いことになる。ただし、人倫道德(倫理)・經学大義(講経)・中国文学(国文)の合計時間はほとんど変わらない。ちなみに、高等学堂の外国語には、3種類あり、普通外国語, 理科応用外国語, 歴史地理応用外国語があった^[14]。

さて、上述したように時間割は「奏定学堂章程」に従って定められるはずであるが、実際は、学生の学力が低く、高等学生の資格がないため、中学の課程を教授していたという^[15]。1908年の東亜同文会の内地調査の資料では、資料3②のような授業表が示されている。東亜同文化会のメンバーは後述する資料4①のように足立や鈴木直三郎と面会しており、彼らへの聞き取りをもとに作成した資料と考えられる。これを見ると、日本語(東文)が各班とも3時間の必修となっており、それ以外に英語かフランス語・ロシア語の欧米語がある。理系の算学・博物学・化学の時間が甲・乙班で各6時間と全体の半分の時間を占める。日本語や理系の授業は日本人教習が担当している科目であり、これは教育課程において日本人教習の講義が重視されていたことを物語っている。なお、1908年の在學生は約300名であったという。

3. 日本人教習・足立喜六の生活

西安滞在中の足立の生活などについての記載はほとんどない。そこで、足立の滞在中、西安を訪問した日本人の旅行記・調査記のなかから関連資料をみてみたい。

3.1 1906年 西安生活のはじまり(足立喜六『長安史蹟の研究』より)

本書には足立の西安の日常生活について書かれた部分は非常に少ない。西安には本人と妻

資料3 陝西高等学堂の授業時間

①光緒32年(1906年)9月18日頃 陝西高等学堂課程表

| | 1日 | 2日 | 3日 | 4日 | 5日 | 6日 |
|------|----|----|----|----|----|----|
| 1時間目 | 英文 | 日文 | 英文 | 英文 | 算学 | 英文 |
| 2時間目 | 歴史 | 英文 | 英文 | 英文 | 英文 | 英文 |
| 3時間目 | 英文 | 講経 | 講経 | 算学 | 英文 | 日文 |
| 4時間目 | 日文 | 日文 | 日文 | 日文 | 日文 | 地理 |
| 5時間目 | 算学 | 英文 | 日文 | 地理 | 倫理 | 体操 |
| 6時間目 | 理化 | 体操 | 国文 | 体操 | 歴史 | 体操 |

・1~3時間目=早班(7時開始, 10時終了)

・4~6時間目=午班(1時開始, 4時終了)

※資料来源:「光緒三十二年八月初一日浙江道監察御使王步瀛奏」『学部官報』7期,『中国近代学制史料 第二輯上冊』631-632頁

②1907年 陝西高等学堂の授業時間

| | 甲班 | 乙班 | 丙班 | 丁班 | 戊班 |
|-------|----|----|----|----|----|
| 修身 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 経学 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 |
| 国文 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 |
| 東文 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 美文 | 6 | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 英文 | 0 | 0 | 8 | 0 | 0 |
| 法文或俄文 | 0 | 0 | 0 | 8 | 0 |
| 法文 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| 歴史 | 1 | 1 | 2 | 3 | 3 |
| 地理 | 2 | 2 | 2 | 3 | 3 |
| 算学 | 6 | 6 | 6 | 4 | 4 |
| 博物 | 6 | 6 | 3 | 3 | 3 |
| 化学 | 6 | 6 | 4 | 3 | 3 |
| 図画 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 |
| 体操 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 |
| 合計 | 36 | 36 | 36 | 36 | 36 |

注記:

甲班(2年半生をして五年級に当てる)

乙班(2年生にして四年級に当てる)

丙班(1年半生をして三年級に当てる)

丁班(1年生をして二年級に当てる)

戊班(半年生をして一年級に当てる)

※資料来源:豫秦鄂旅行班 第二卷 第三編 教育 陝西省 陝西高等学堂

と子とともに滞在した^[16]。彼らの居所については、わずかではあるが『長安史蹟の研究』に以下の記述がある。

(1906年3月22日)直ちに陝西高等学堂に行つて、監督始め職員一同に對面の式を済して、午後四時頃準備せられた東柳巷の寓所に著した。門前には東教習足立公館と大きな朱唐紙が掲げてあった。公館とは官職のある人の邸宅の義で、之が思出の多い私の四年間の寓居である。東柳巷は閑静な横町で向側には布政使樊增祥君の邸宅もある。我が住宅は廣大ではない。一堂二室と外に仕丁室と炊事室と厩舎とがある。邸内は一面に煉瓦で敷き詰められていて、中庭に深さ五十尺余りの清冽な井戸がある。房後には大きな花蘇芳が一株あって、時々鶻鴉が来ては嘲うような頓狂な鳴き声をするのみで、外に荷物もない。元來此の家は東家某財産家の別宅なので、支那流に丹碧を塗りたてて、漢唐の名詩や嘉言を欄間や障子に貼っているが、誠に支那趣味の深い感じのよい家であった。
(『長安史蹟の研究』, 1933年版, 10頁~11頁)

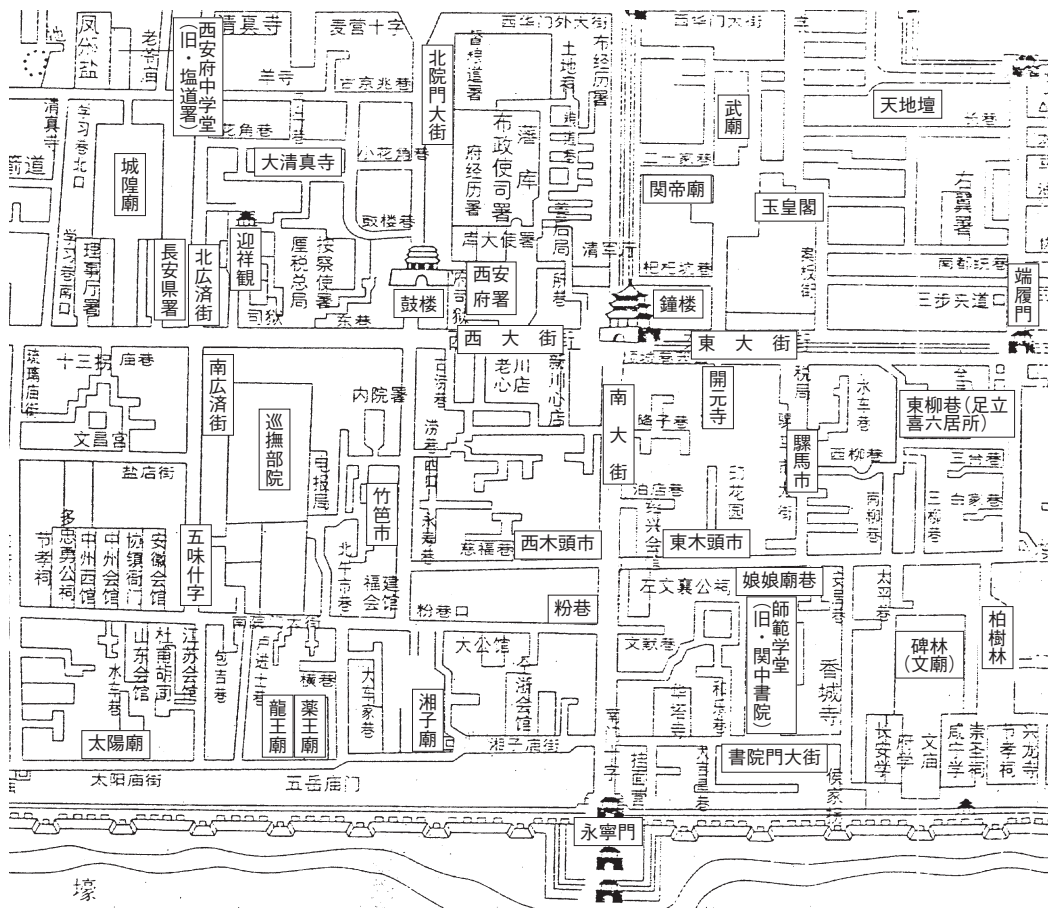
公館は西安城内の東柳巷、すなわち、現在の東大街の南、驛馬街の東に所在した。「東教習」とは日本人教習のこと。非常に思い出深い寓所であったようである。

3.2 東亜同文会調査団の西安訪問 (1907年8月19日~9月7日) [資料4①]

上海に開校されていた東亜同文会は外務省の支援を受け、清国内地調査をおこなっていた。1907年には河南省・陝西省・湖北省をめぐる豫秦鄂旅行班(5名)が組織され、8月19日から9月7日まで西安に逗留した。その間の足立らと関係する記述を整理したものが資料4①である。彼らは西安到着後、中学堂教習の阿部に西安の事情を尋ね、師範学堂の5名の教習を訪問している。8月24日には高等学堂の鈴木を訪ね、25日に足立を訪ね、9月1日夜には足立に招待されている。9月2日は足立が写真撮影をし、9月4日にも足立が招待している。短期間に密度の濃い交流をしている。調査班は旅行日誌のほかに、教育や衛生その他様々な西安に関する項目について報告書にまとめている。足立との対話から多くの現地情報を引き出したのだろう。

3.3 桑原隲蔵・宇野哲人の西安訪問 (1907年9月19日~10月9日) [資料4②③]

日本の東洋史研究者の草分けである桑原隲蔵(生没年:1871年~1931年)は明治40年(1907)4月から明治42年(1909)まで、中国哲学者の宇野哲人(生没年:1875年~1974年)は明治39年(1906)から明治41年(1908)まで、ともに北京に留学していた。その間



清末西安城図



前門居涼花柳東

西安東柳巷宿舍前 (鶴田温子氏所蔵)



西安の足立喜六 (鶴田温子氏所蔵)

資料4 足立喜六と日本人旅行者

資料4① 東亜同文会ノ清国内地調査 豫秦鄂旅行班ノ部

豫秦鄂旅行班 旅行日誌 (日本外務省外交記録, 外務省外交史料館所蔵, JACAR: B03050597000)

参加者 5名 鈴木秀夫・松尾庄次郎・松本清司 (松本華陵)・居川栄世・三枝源八

全期間 1907年 (明治40年) 7月9日~10月22日 西安 8月19日~9月7日

行程 上海→洛陽→臨潼→西安→藍田→襄樊→漢口→上海

| | | |
|-------|---|--|
| 8月19日 | | (臨潼出発, 西安到着) |
| 8月20日 | 晴 | 西安府中学堂あり。阿部正次郎 (ママ) 教習あり。同氏を訪問し, 西安事情を聞く。 |
| 8月21日 | 晴 | 師範学堂あり。日本人教習五名。今日は氏等を訪問す。 |
| 8月24日 | 曇 | 高等学堂で教習たる日本人二名。今日は其内の鈴木氏を訪問す。其令夫人余等を優待せらるる, 感謝の至りなり。 |
| 8月26日 | 雨 | 高等学堂教習安達 (ママ) 氏を訪う。令夫人の寛待や深く謝する所なり。 |
| 9月1日 | 晴 | 至未央宮十八里。徒歩。未央宮は漢朝の宮殿にして, 現在西門外頭十八里畑中にあり。今甚何物をも残らず, 徒だ名あるのみ。西門外一里に景教流行の碑あり。歴史上参考に資すべきものなり。夜は, 足立氏より招待さる。 |
| 9月2日 | | 足立氏自ら記念撮影さる。願くば此写真永久に留めん。夜は阿部氏より饗を受く。 |
| 9月3日 | 晴 | 至大雁塔十里。徒歩。大薦寺に塔あり。塔は唐の神宗其母の喪に当り, 目前に×の拝せんとす。己が居城の正南に作れるものなりと。今は南門前十里にあり。塔は高く, 中天に懸かり, 高く登りて西南城中望見するに足る可し。依って此行を企つ。南門外 (前) 右手に小雁塔あり。其史的事蹟を知らず。只だ塔は白馬寺の塔と同式なり。 |
| 9月4日 | | 足立氏より招かる。 |
| 9月5日 | | 西安に滞る十有余日。明日は愈々出発と定まれば, お世話様になりし各人様に御礼廻りす。 |
| 9月6日 | | 今日出発の筈なりしも事故ありて延期となす。 |
| 9月7日 | | (西安出発, 藍田到着) |

※×は解読不能。

資料4② 桑原隲蔵『考史遊記』長安の旅

参加者 2名 桑原隲蔵・宇野哲人 (召使い・万姓)

全期間 1907年 (明治40年) 9月3日~10月28日 西安 9月19日~10月9日

行程 北京→鄭州→洛陽→西安→鄭州→北京

| | | |
|-------|--|--|
| 9月19日 | | (西安到着) |
| 9月20日 | | 午前府内の高等学堂に到り, 教習鈴木氏を訪い, 午後師範学堂に到りて, 日本人の教習諸氏を訪う。現在西安在住の日本人教習すべて八人。森・中沢・田中・鈴木・足立の五氏は皆東京高等師範学校出身にして, 阿部氏は臨時教員養成所の出身なり。その他に日本大学出身の吉川, 美術学校出身の松里の二氏あり。午後三時, 森・田中二氏に伴われて, 文廟および碑林を観る。 |
| 9月21日 | | 復, 碑林を観, ついで師範学堂を訪う。師範学堂はもとの関中書院の在りし処。……この夕, 師範学堂にて, 日本人教習諸氏の招宴を受く。 |
| 9月22日 | | 午後, 鈴木・足立二氏及びその令閨等と大雁塔に遊ぶ。 |
| 9月28日 | | 午前九時五十分, 鈴木氏の公館を辞し安定門を出で, 金勝寺を過ぎ, 遙に未央宮の宮址を望みつつ咸陽に向かう。 |

| | |
|-------|---|
| 10月4日 | [咸陽からの帰途] 五時四十分西安府三府巷の鈴木氏公館に着す。 |
| 10月6日 | 午後鈴木氏夫妻・足立氏夫妻及び阿部氏等とともに、唐の大明宮の遺址を観る。 |
| 10月9日 | 午前九時馬車に塔じて西安を発す。予西安に在ること前後十余日。その間常に邦人の歓待を受けほとんど驕旅の情を忘る。今後宇野君と寥々遠行す。多少の傷心なきを得んや。 |

資料4③ 宇野哲人『支那文明記』（『清国文明記』）長安紀行

参加者 2名 宇野哲人・桑原隲藏（召使い・万姓）

全期間 1907年（明治40年）9月3日～10月28日 西安 9月19日～10月9日

行程 北京→鄭州→洛陽→西安→鄭州→漢口

| | |
|-------|--|
| 9月19日 | (西安到着) |
| 9月20日 | 長安に入りし明日、先ず高等学堂に到って鈴木氏に面会し、ついに同氏の参府巷の宅に寄寓することとなったが、同氏及び令夫人貞子の款待至らぬ限なく、ほとんど郷里にある思いをしたのは実に感謝に勝えないのである。師範学堂の森・田中両氏に伴われ、碑林を見て後、永寧門に上る。 |
| 9月22日 | 鈴木氏同夫人、足立氏同夫人令息と共にこの地〔大雁塔〕に遊ぶ。※ |
| 9月28日 | 午前九時、参府巷の鈴木氏宅を發し西安定門を出て、崇仁寺を左に見て行くこと十数里、右方約五里に未央宮の遺址を望む。……四十分余を費やして渭水を渡り……。 |
| 10月4日 | [店張・咸陽からの帰途] 午後四時半、西安参府巷鈴木氏の宅に帰着す。行程九十里。この夜、足立氏を訪えば、氏曰く崇仁寺の大秦景教流行中国碑は一外国人来りてこれを持ち去らむことを計画したので、無用心だという議論おこりてこれを碑林に移さんとする議ありと。我らが帰路西関にて碑下の亀趺を運べるを見たのはけだしこの碑であろう。 |
| 10月6日 | 鈴木氏同夫人、足立氏同夫人令息、阿部氏、及び桑原君と共にこの地〔大明宮〕に遊ぶ。 |
| 10月9日 | (西安発) |

※宇野書には9月29日とあるが桑原書により9月22日と訂正。

足立の名が旅行記にあらわれるのは9月22日に鈴木夫妻と大雁塔を訪問し、10月6日に鈴木夫妻・西安中学堂教習の阿部正次郎（資料4①に名あり）と唐の大明宮遺跡を訪問した記事である。この二日間については、宇野哲人『支那文明記』も同じであるが、渭北・咸陽の調査から西安に帰ってきた10月4日に足立を訪問している。この日の話題が西安の西門外の崇仁寺に放置されていた「大秦景教流行中国碑」がデンマーク人ホルムの手によって盗難されなかったため、碑林にこの碑を移したことであった^[17]。桑原もこの場に同席し、10月6日に碑林にて景教碑を見たという^[18]。この日本人教習の足立と二人の学者との西安における交流は双方に影響を及ぼし、その後の日本の東洋学にとって重要な出会いであったと言っても過言ではない。

おわりに

『長安史蹟の研究』の著者・足立喜六の陝西高等学堂の日本人教習時代に着目し、そこから清末の西安の教育と日本人教習の関係性についての資料についての収集・調査・分析をお

こなつた。足立が西安に滞在した日露戦争後の1906年から1910年は中国全土を見ても日本人教習が最も多かつた時期で、陝西省においても1908年には10人の教習が在籍するなど、日本人教習の教育への影響は大きかつた。陝西高等学堂の授業時間についても、日文が開講され、日本人教習による算学・理科・博物学なども重視された。教育課程においても日本人教習は重要な位置を占めていたのである。授業以外の生活面では、西安を訪れた東亜同文会の調査班を招き、桑原隲蔵・宇野哲人と遺跡をめぐるなど積極的に交流をはかつた。それは、東亜同文会の西安における教育等の報告書に生かされ、桑原・宇野の歴史研究に生かされた。また、足立が『長安史蹟の研究』を著すきっかけともなつた。

足立が西安の教習となることが結果として、本人にも周囲の人々にも大きな影響を与えることになつた。では、なぜ、足立はすでに清末には一地方都市となつた西安で教鞭を執る決心をしたのか、この問題については、さらなる足立に関する資料を探す必要があるだろう。

[参考写真]

以下、『長安史蹟の研究』所載の古写真と、その遺跡・文物の現状を示す写真を示す。足立の時代から現代までの百年で西安の風景がどう変わったのかについては別に論じることとしたい。



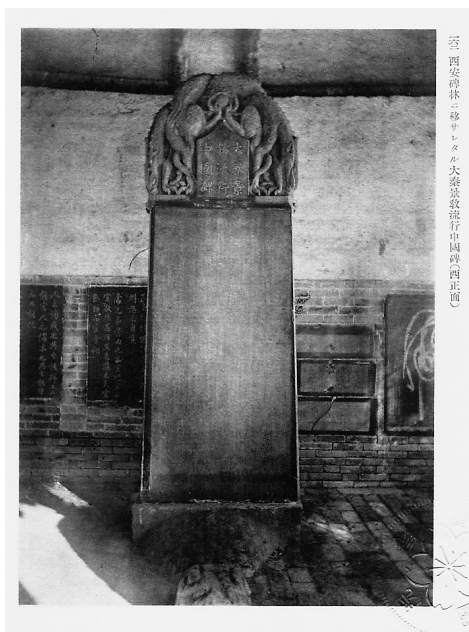
大雁塔（『長安史蹟の研究』）



大雁塔（2008年村松弘一撮影）



碑林移転前の大秦景教流行中国碑 (『長安史蹟の研究』)



碑林移転後の大秦景教流行中国碑 (『長安史蹟の研究』)



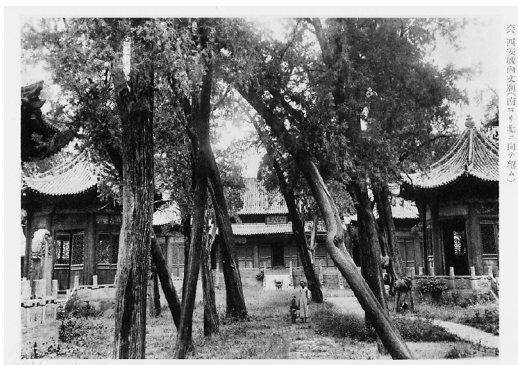
大秦景教流行中国碑 (2008年村松弘一撮影)



大明宮含元殿（『長安史蹟の研究』）



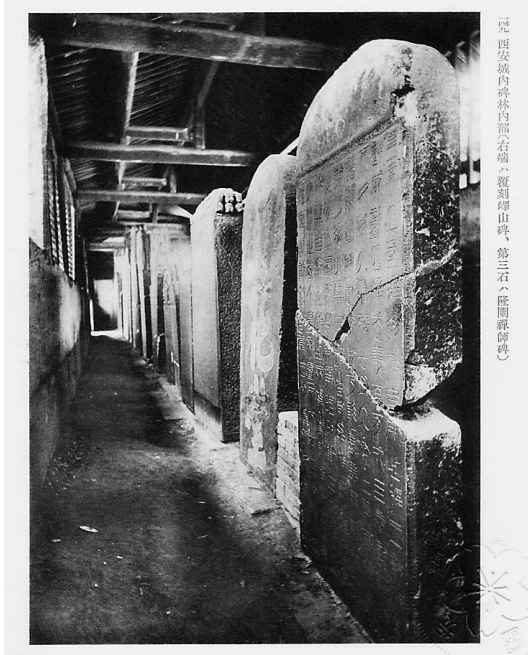
大明宮含元殿（2008年村松弘一撮影）



西安文廟（『長安史蹟の研究』）



西安文廟は1955年に焼失。文廟の再建はされず、奥に碑林が見える（2008年村松弘一撮影）



西安碑林内部（嶧山石刻、『長安史蹟の研究』）



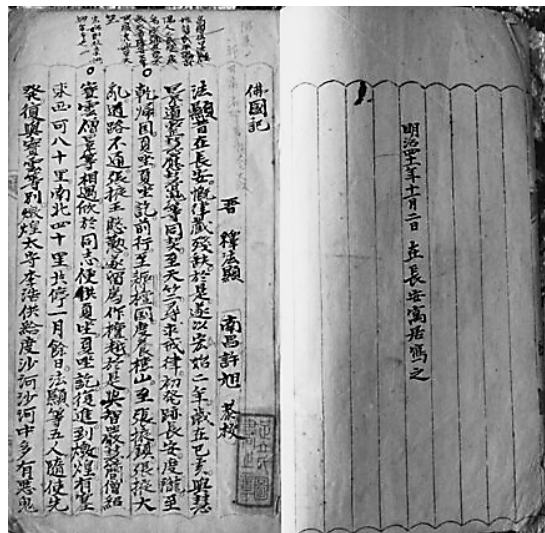
西安碑林内部（2008年村松弘一撮影）

注

- [1] 2010年3月、報告者は足立喜六氏の孫にあたる鶴田温子氏（静岡県藤枝市在住）の所蔵する足立喜六関係資料を調査する機会を得た。幼少期の頃まで足立氏とともに過ごした鶴田氏は足立氏の所蔵品やその事績に関する多くの資料を所蔵されている。300枚以上の古写真・ガラス乾板資料および拓本等は貴重な資料である。古写真のなかには『長安史蹟の研究』に掲載されているものもあるが、未公開のものもあり、著書が編集過程の中でどの写真を使い、使わなかったについて調べることもできる。今後も調査をすすめたい。また、資料群のなかに、昭和21年（1946）6月20日付の足立氏の履歴書があった。この履歴書の主な事項をまとめたものが資料1「足立喜六年譜」である。その履歴書は1933年に『長安史蹟の研究』を刊行した記載で終わって

いる。

- [2] 1905年に陝西高等学堂の周鏞らが来日し、日本人教習の調査をおこなった(『西北大学史稿 上卷(修訂本)1902—1949』西北大学出版社, 2002年)。足立の西安派遣がこの来日と関わっているのかはわからないが、今後も調査をすすめる必要があるだろう。
- [3] 足立の西安の滞在期間について、足立履歴書では、1906年2月20日に赴任とあるが、『長安史蹟の研究』では、1月に招聘が確定し、2月16日出発、3月22日に西安到着とある。帰国について履歴書に記載はない。『長安史蹟の研究』小引では1910年2月まで西安にいたことが記されている。すなわち、足立の西安滞在は1906年3月22日から1910年2月までと確定できる。



『仏国記』

- [4] 鶴田氏所蔵資料には西安滞在時期に足立が書き込みをした『仏国記』がある(写真参照)。本書の冒頭には「明治41年11月2日 在長安寓居写之」とあり、足立氏自らによる写本である。明治41年は1908年。長安とともに調査した桑原隲藏氏が西安を訪れた明治40年(1907)9月の約1年後ということになる。足立氏はそれから約30年後の昭和11年(1936)に『考証 法顯伝』を刊行している。
- [5] 汪向荣『日本教習』生活・読書・新知三聯書店1988年。日本語訳は竹内実監訳『清国お雇い日本人』朝日新聞社, 1991年。
- [6] 日本人教習に関する研究としては、実藤恵秀『中国人日本留学史稿』日華学会, 1939年, 阿部洋・稲葉継雄・蔭山雅博「東アジアの教育近代化に果たした日本人の役割—お雇い日本人教習と中国・朝鮮」『日本比較教育学会紀要』8号, 1982年, 蔭山雅博「清末における教育近代化過程と日本人教習」(阿部洋編)『日中教育文化交流と摩擦』第一書房, 1983年, 国立教育研究所『国立教育研究所紀要』115集(お雇い日本人教習の研究—アジアの教育近代化と日本人—)1988年, 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』龍溪書舎, 1990年等参照。
- [7] 本報告で利用した外務省記録は国立公文書館アジア歴史資料センターWEBページで閲覧可能である。<http://www.jacar.go.jp/>
- [8] 上掲『西北大学史稿』(76頁)には、1913年夏に西北大学の馬凌甫が東京へ赴き、2人の日本人教習を招聘したとあるが、日本側の記録では2人はすでに1912年に西北大学に在職している。
- [9] 『統修陝西通志稿』卷三十六参照。筆者は2002年に西北大学に留学しており、その期間中、西北大学開学百周年記念式典を開催した。つまり、現在の西北大学は陝西大学堂をその起源とみなしていると考えられる。
- [10] 上掲『西北大学史稿』参照。
- [11] 上掲『西北大学史稿』。
- [12] 「光緒三十二年八月初一日浙江道監察御使王步瀛奏」『学部官報』7期, 朱有瓚主編『中国近代学制史料 第二輯上冊』華東師範大学出版社, 1987年631-632頁
- [13] 「奏定学堂章程・高等学堂章程」朱有瓚主編『中国近代学制史料 第二輯上冊』華東師範大学

出版社, 1987年 570-581頁。

[14] 上掲『西北大学史稿』参照。

[15] 「東亜同文会ノ清国内地調査 豫秦鄂旅行班ノ部 豫秦鄂旅行班 第二卷 第三編 教育」(外務省外交史料館所蔵, 外交記録, JACAR: B03050600800)。

[16] 後述の宇野哲人『支那文明記』では、「足立氏同夫人令息」とある。なお、鶴田氏所蔵の資料にも家族の写真がある。

[17] 『支那文明記』には崇仁寺とあるが、『長安史蹟の研究』には崇聖寺、『考史遊記』には金勝寺とある。大秦景教流行中国碑のレプリカはホルムの手によって南の長江を渡り、上海からアメリカへ運ばれ、メトロポリタン美術館に保管された。そこで複数のレプリカがさらに造られ、それらは、フランスのギメ東洋美術館や大英博物館、米国のエール大学などに分けられた。西安で最初に造られたレプリカはバチカン美術館にあるとされるが、筆者は未見である。今後、調査の機会を持ちたいと考えている。なお、この碑の顛末は以下に詳しい。Michael Keevak “The Story of a Stele: China’s Nestorian Monument and Its Reception in the West, 1625-1916” Hong Kong University press, 2008。

[18] 桑原隲蔵「大秦景教流行中国碑に就いて」『東洋史説苑』弘文堂書房, 1927年, のち『桑原隲蔵全集 第一巻』岩波書店, 1938年所収。

(むらまつ こういち 学習院大学国際研究教育機構教授)

Education and Japanese Educators in the Final Years of the Qin Dynasty: Kiroku Adachi in Xi'an

Koichi Muramatsu

Abstract

Kiroku Adachi is known as an author on “Choan Shiseki no Kenkyu” (The study of historical sites in Chang’an). He stayed at Shaanxi High Academy in Xi’an as a Japanese educator at the end of the Qing dynasty, between 1906 and 1910. While he was staying in Xi’an, he met Jitsuzou Kuwahara and Uno Tetsuto, who laid the groundwork for Oriental Studies in Japan. The encounter would prompt Adachi to begin his Oriental Studies. In this paper, by examining various documents, I investigate Kiroku Adachi’s education, his study and his life in Xi’an. First, I order Adachi’s personal history, based on the documents in the possession of his grandchild. In Chapter I, “The Trend of Japanese Educators in Shaanxi”, I researched documents of the Japanese Diplomatic Record Office of the Ministry of Foreign Affairs about the situation of the Japanese Educators who stayed in Xi’an between 1906 and 1915. In Chapter II, “Approval Process and Curriculum of Shaanxi High Academy”, I investigated Chinese documents about the class schedules of the Shaanxi High Academy where Adachi taught. In Chapter III, “The Life of Japanese Educator Kiroku Adachi”, I analyzed documents concerning the lives of Adachi, Jitsuzou Kuwabara and Tetsuto Uno in Xi’an. These materials describe the attempted theft of the “Nestorian monument” by the Dane Frits Holm in 1907. These records describe the situation regarding the protection of cultural heritage in Xi’an.